マスカーレイドに異常なし！？　第４話　アクサの平和な一日

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マスカーレイドに異常なし！？　第４話　アクサの平和な一日

【Ｎコード】
Ｎ６９５４Ａ

【作者名】
水鏡樹

【あらすじ】
マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第４話は、取材に来たクネスを快く受け入れ、アクサ先生の一日があきらかになる。どたばたと混乱が続く、アクサの平和な一日とは？

その1：クネスの取材

月に代わって朝日が昇り、マスカーレイドの一日が始まる。
住民たちの声にまじって、小鳥のさえずりがピチピチと聞こえていた。
そんないつもと同じ一日の始まりで、早くもいつもと違う一日を迎えようとしている人物がいた。
住宅街から少し外れた場所に位置するアクサ医院の診察室兼院長室。
高級そうな黒塗りの椅子に座り、年季の感じられる白衣できょとんと首をかしげるアクサ＝ヤーナだ。
「わたしを取材？」
「今度書こうと思っている小説で医者を登場させようと思うんですよ」
アクサの前に立っているのは、シャツとジーンズに身を包んだ、小説家の卵クネスである。
今日はいつもの特等席へは向かわず、直接家からアクサ医院を訪ねてきていた。
「一番身近な医者といえばアクサ先生だし……」
「そりゃあそうだけど……」
アクサは髪を軽くかきあげ、窓の外へと目を移した。雲ひとつない青空から降り注ぐ日光が、
容赦なくアクサを照らしつける。
「あまり参考にならないと思うわよ？」
「そんなことないですよ。邪魔にならないようきちんと心がけますから」
両手を合わせて頭を下げるクネスの懇願に、アクサが折れたようだ。
小さく頷き、ニッコリと微笑んでみせる。
「わかったわ。そのかわり一日だけよ」

「ありがとう。緊張しないでいいですから、いつもどおりにお願いします」
クネスは持っていたバッグからメモ帳と筆記用具を取り出すと、アクサの脇にあった小さな丸いすを持って邪魔にならない死角へと移動した。
午前九時のチャイムがなると、アクサ医院は正式な開院を迎える。入院のための病室が三つと診察室兼院長室が一つ、あとは受付という簡易的な病院だ。
看護婦が数人いるもののお手伝いといった意味合いが強く、診察や手術といった医術関係の仕事はすべてアクサ一人で切り盛りしている。そう考えれば簡易的といえど充分な施設の整った病院といえるだろう。
「それじゃあ、最初の患者さんを呼んで」
アクサに指示されると、若い看護婦さんが患者さんを診察室へと入れた。

その2：患者ハンター＝バウンティ

ペン先をメモ帳の上でトントンと叩きながら患者を待っていたクネスは、意外な人物の出現にペンを落としてしまった。
「ん、なんでクネスがいるんだ？」
ペンを落とした音に反応したのか、死角にいるはずのクネスをあっさりと見つけてくる。
いつもと同じ迷彩服に身を包んだハンターだ。
「それはこっちのセリフだよ。ハンターが怪我したなんて聞いたことない」
「最近はな……」
意味深な言葉をボソリとつぶやき、ハンターは患者が座る椅子へと座った。
「それで、今日もいつものところ？」
アクサに問われて、口に手をやるハンター。ちらちらとクネスのようすを伺いながらも返答をしぶる。
クネスは首を傾げるだけだったが、アクサはすべてを察知しているようだった。
「それじゃあ今日は薬だけ出しとくわね。受付でもらって帰って」
「ああ、すまない」
ハンターはすぐさま席を立つと、クネスへと挨拶もそこそこに診察室を出て行ってしまった。
「どうしたんだろ、ハンター。診察に来たんじゃないんですか？」
仏頂面でペンをくるくると回しながら、ハンターが出て行った扉からアクサへと視線を移す。
アクサはカルテになにかを記入しながら、
「人前で診察を受けるのが嫌だったんじゃないの？」

「恥ずかしいってガラじゃないと思うけど」
「そうじゃないんだけど……まあ詳しい事情が知りたかったら直接本人に聞くことね」
「えっ、アクサ先生が教えてくれれば……」
何気にぼやいただけのクネスに、アクサはビシッとゆびを突きつけていた。
「なっ！？」
「いい？　医者って言うのは患者の体だけでなく、心も健康にしないといけないの。患者のプライバシーにかかわることを他言するなんて言語道断！」
勢いよく立ち上がり、コブシを握りつつアクサは熱弁をふるう。
「クネスだって自分が病気になったとき、他人にペラペラと症状なんかを話す医者だったら嫌でしょ？」
「まあ、確かに……」
「わたしは医者として、すべての患者さんの心身ともに健康にすることを日ごろから心がけているのよ！」
コブシを高らかにかかげて、アクサが宣言する。クネスは何度も頷きながら、アクサに尊敬の眼差しを送っていた。だが……
「いいこと言ったんだから、ちゃんとメモしておいてね」
メモを指差し高らかに笑うアクサに、ちょっぴり尊敬心が薄れたクネスだった。

その3：患者ではないマックス＝フォール

その後しばらく、アクサ医院にはだれも訪れなかった。暇そうにメモ帳をもて遊ぶクネスの横で、アクサは古いカルテを取り出しては、なにやら熱心に読んでいる。

カルテも当然患者の症状や情報が明確に書かれているので、クネスは見せてもらえないのだ。

「ちょっと、困ります！」

「いいからいいから、おれとアクサ先生の仲だから問題ないって」

制止する看護婦を振り切り、診察室の扉を開けたのはマックスだった。手にはバラの花束を持ってきている。

「アクサ先生。今日もお美しい！」

「あらやだ、マックスったら心にもないことを……」

「いやいや、アクサ先生に比べたら、どんな女性も見劣りしますよ！」

部屋の隅にいたクネスの存在にまったく気がつかず、マックスはバラの花束をアクサへと渡した。マックスの後を追うように、かぐわしいバラの匂いが室内へと広がっていく。

「いつもありがとう。マックス。おかげで院内の病室がすごく華やかになってるわ」

「あ、あの……病人にじゃなくてアクサ先生へのプレゼントなんですが……」

「あら、そうだったわね。ごめんなさい。オホホホ……」

手に口をあてわざとらしく笑うアクサだったが、マックスはめげるわけにはいかなかった。

アクサの手を優しくつかみ、しゃがみながら口元へと運ぶ。

「ところで次の日曜日、アクサ先生はお暇ですか？」
「うーん、病院は休みだけどね……」
「でしたら一緒に遠出をしませんか？　夜景の美しい岬をみつけたんですよ。もちろんアクサ先生の美しさには及びませんが……」
「やだ、マックスったら。年上のお姉さんをからかうもんじゃないわよ」
「いえいえ、本心ですよ。世界一美しいダイヤモンドだって、アクサ先生とは天と地の差があるんですから」
　必至に笑いをこらえているクネスに、マックスはいまだ気がついていない。
迷っているアクサを前に押しどころだと判断したマックスは、ずいと体を近づけ真剣な眼差しで告げた。
「で、アクサ先生？　次の日曜日は……」
「あ、ごめんなさい。よく考えたらその日は妹の結婚式だったわ」
　肩すかしを食らって、こけそうになるマックス。同時に先週の出来事を思い出す。
「た、たしか先週は兄の結婚式では……」
「そうそう。いいことって重なるものなのよね」
まったく手ごたえを感じられず、マックスはがっくりとうなだれて引き返しはじめた。そこでようやく笑いをこらえるクネスの姿が視界に入る。
「うおっ、クネス！　いつからここにいた！」
「マックスが入ってくる前からいたさ。いやー、おかげでいいものが見れたよ。ニオに伝えておかないと……」
「うわっ、ちょ、まて！　今のは練習だったんだよ！」
「そんな……練習だなんて。わたしをもてあそんだのね！」

ヒックヒックと声を立てて、アクサは泣き出してしまった。慌ててマックスはアクサに寄り
添い、弁解を試みる。
「いや、これは、その……ニオでいつも練習してるってことですよ」
「なるほど。しっかりとニオに伝えておいてあげよう」
「うあああ……」
どつぼにはまり進退きわまったマックスは、診察室から逃げ出そうと走り出した。
「こんにちはー。オートエーガンでーす」
タイミングよく診察室の扉を開けたのは、アクサの昼食を配達しに来たシェラだった。マッ
クスはそのままシェラとぶつかり、室内へと跳ね飛ばされた。
「マ、マックス！　なにやってんのよこんなところで！」
シェラはマックスの体当たりもまったく意に介さず、逆に床へと突っ伏した後のマックスの
存在に慌てふためいていた。手に持っていたアクサの昼食を机の上におき、マックスへと駆け
寄ると、頭を起こし両手で支えてあげる。
「ちょっと、大丈夫？」
「ああ、大丈夫だよ。ありがとうシェラ」
起き上がろうとしたマックスの横で、クネスが半笑いのままシェラへと伝えた。
「ちょうどいいところにきた。マックスがアクサ先生をナンパしてたんだ。ニオに伝えておい
てくれないか？」
ガンッ！
「いてぇ！」
頭を支えていたシェラが手を離し、マックスが後頭部を床へとぶつける。痛みにこらえるマ
ックスをさめた目で見下ろし、シェラは冷たく言い放った。

「へぇー、そんなことをしに来てたんだ」
「いや、違うって」
「帰るわよマックス。どうもお騒がせしました」
「ちょ、痛い、離せって、シェラ！」
頭の代わり足を持ったシェラは、マックスを引きずりながら診察室を出て行った。
「フフ、ちょっとかわいそうなことしちゃったかしら？」
「あれ、泣いてない……」
「もちろん嘘泣きよ。マックスにはいい薬になったんじゃないかしら？　ほら、わたしって医者だから、こういう薬を出すときもあるのよ」
うまいことを言ったと自画自賛しながら、うんうんと頷くアクサ。
クネスはアクサに合わせて乾いた笑いをもらすのがやっとだった。

その４：患者？フェミリー＆アルマ

昼食も済み、午後の診察が始まる。だが、なかなかアクサ医院に訪れる人はいなかった。
クネスは午前の出来事をメモ帳にまとめ始め、アクサは器用にペンを回しながら、肘を付いて窓の外を眺めている。
「大変、大変だよ！　アクサ先生！」
窓ガラスを叩く音が部屋中に響き渡った。クネスが顔を上げると、そこにはフェミリーの姿があった。
「どうかしたの？」
アクサが窓を開けると、フェミリーは中へと入ってきてアクサの上をクルクルと飛び回りながら叫んだ。
「アルマさんが、アルマさんがさっき馬車と衝突して！　頭から血を流して倒れてるのよ！」
「なんですって！」
椅子にかけてあった白衣を手に取り、アクサは診察室から病院を飛び出していった。クネスも荷物をまとめると、それに続く。
「急患よ！　手術の準備をしておいて！」
アクサの真剣な眼差しに、看護婦の一人が無言で頷く。フェミリーの案内で二人は路地を進み、わき道へとそれた。
「うあああああ！」
クネスの絶叫が響く。そこには、頭どころか全身を真っ赤に染めたアルマが、地面へとうつ伏せで倒れていた。

「アルマ！　しっかりしてよアルマ！　アクサ先生を連れてきたからもう大丈夫だよ！」
フェミリーが寄り添いアルマの体を揺すると、アクサはおもむろに頭を上げた。
「ア、アクサ、助け……」
アルマが右手を、アクサに向かって伸ばしてくる。クネスの横でアクサは、腕を組んだまま
黙ってアルマを見下ろしていた。
「なにやってんですか！　早くしないと死んじゃいますよ！」
横でクネスがアクサを急かす。するとアクサは伸びてきていたアルマの手を、突然踏みつけ
ていた。
「いたっ！」
アルマは機敏な動きで起き上がると、踏まれた手に息を吹きかけている。
「へえ、馬に衝突されてできた傷より、わたしに踏まれた手のほうが痛いの……」
「あっ……」
アルマは周りをきょろきょろと見回す。冷ややかに見下ろすアクサに、ポカンと呆けている
クネス、そしてなにやらアルマを制止させようと慌てふためくフェミリー。
アルマはゆっくりと元の体勢へ戻ると、アクサに向かって腕を伸ばしていた。
「アクサ、痛い、助けて……」
アクサは容赦なく、もう一度アルマの手を踏みつけていた。
「ちょっ！　痛いって！」
「痛いじゃないの！　まったく、トマトケチャップでわたしを騙せるとでも思ってるわけ？」
「へっ？　トマトケチャップ？」

クネスがアルマに近づいていく。しゃがみこむと酸味のきいた匂いが、自然とクネスの鼻を刺激してきた。
「ほ、本当だ。これ血じゃない」
「まったく、人騒がせな。手術の準備までさせてるってのに」
「いやいや、ごめんごめん。フェミリー、わたしの勝ちだね」
ケチャップまみれのままアルマは起き上がると、アクサに向けていた手をフェミリーに向ける。フェミリーはしぶしぶ懐から、五千バッツ札を取り出して渡した。
「でもばれたのはアルマさんのせいだよ……頭から血を流してるって説明して連れてきたのに、全身赤く染めてるんだもん」
「こっちのほうがリアルかなって思ったんだけど。そうか匂いがあったか……」
「匂いがなくても見れば分かるっての！」
するどいアクサのツッコミで、高らかにアルマが笑う。
「さすがに現役の女医さんは手ごわいわね、フェミリー」
「五千バッツ……今月の小遣い……」
すでにフェミリーにアルマの声は届いていなかった。財布の中の残金を数えてはため息をついている。
「小遣いって、フェミリーは一人暮じゃ？」
クネスが尋ねるも、フェミリーは答えずに財布を懐に戻し、ふらふらとどこかへ飛んでいってしまった。
「マスカーレイドに住んでるわけじゃないから、一人暮らしじゃないのかもしれないよ？」
呆然とフェミリーの行く手を見つめていると、代わりにアクサがクネスの質問に答えた。

「え、そうだったんですか？」
「近くの森に住んでるって話よ。好奇心旺盛だから、人間と一緒にいるほうが楽しいみたいだけど」
「トラブルメーカーのフェミリーを住ませてくれる奇特な家はないってことだ」
「あんたも十分トラブルメーカーでしょうが……」
アクサが腰を下ろし、げんこつを一発食らわせる。アルマが苦情の声を上げるまえに、冷たく告げた。
「いい？　そんなことやってると、真偽の区別が付かなくなるのよ。本当に大怪我をしたときに、嘘だと思ってわたしが来なかったらどうするつもり？」
「いいや、アクサは何回でもきてくれる。わたしにはわかってる。アクサってやさしいもんね」
顔を赤く染めながら、アクサは体を震わせていた。
「照れちゃって、かわいいわね、アクサ」
「怒ってるのよ。まさか何度もこんなことするつもりじゃないでしょうね？」
「まさか。いやいや、そんなはずは。ねえ？」
「こっちが聞いてるのよ。本当でしょうね？」
目の前で握りこぶしをふらつかせると、アルマは乾いた笑いでごまかそうとしていた。
「本当でしょうね！」
「本当です本当です。二度とこんなことしません。するもんですか」
「よろしい！　では帰ってよし！」
ケチャップを全身につけたままアルマは立ち上がると、ふらふらとオートエーガンへ向かって歩き出した。
「もう、ちょっと医院へ寄っていきなさい！」

アルマの手を引き、アクサ医院へと三人は向かった。時折地面に落ちるケチャップが、本物の血痕のような痕跡を残す。
病院に着くとアクサはアルマを止め、建物の外周を指差した。
「院内にケチャップが垂れるのいやだから、外を回ってね」
「えぇ、いいじゃんか別に」
「よくない！」
しぶしぶアルマは病院の外を回り、診察室の窓がある面へと向かった。少し待つとアクサが窓を開ける。手には先ほどシェラが持ってきた昼食の食器が握られていた。
「はい、これ」
「え？」
「オートエーガンに帰るんでしょ？　ついでに食器、持ってかえって」
「あの、ケチャップを拭くためのタオルを貸してくれるんじゃ……」
「だれもそんなこと言ってないでしょ。それから地面に垂れたケチャップはきちんと掃除するのよ、分かったわね？」
「だったらなおさらタオルを……」
「分かったわね！」
「は、はいぃ……」
しょんぼりとうつむいて、とぼとぼと去っていくアルマ――手にはオートエーガンの名前が刻まれた食器をしっかりと握っている。
「ちょっとかわいそうな気が……」
「アルマはいたずら好きだからね。これぐらいしたほうがいい薬になるの。なんてったって医者だからね……って、うまいこと言うね、わたし」
「マックスの時とおなじこと言ってるだけじゃ……」

「オホホホホ、なにかいったかしら？」
口元は微笑んではいるアクサだったが、目は笑っていなかった。
クネスはぶんぶんと首を振り、気づかれないようにメモ帳に走り書きした。
――怒らせると、怖いかも。

その5：自警団への往診依頼？

日も暮れ始めても、やはりアクサ医院にはだれもこなかった。
「こんな状態で、経営が成り立ってるのだろうか……」
アクサの顔をうかがいながら、小さな声でつぶやくクネス。アクサは鼻と唇の間にペンを挟んで、やはりカルテとにらめっこをしている。
クネスも改めて、メモを見返してみた。今日の収穫はマックスのくどき文句――お世辞にもうまいとは言えない――ぐらいで、小説の参考になるようなものはなにもない。
「あの、アクサ先生」
「ん、どうかした？」
「いや、退屈なんで、医者を志した理由とか、そういう話が聞けたら……」
クネスが新たな情報を得ようと一歩踏み出した時、診察室の扉が勢いよく開いた。
「アクサ先生はいらっしゃいますか？」
そこには自警団のハリアーが、背筋をまっすぐに伸ばした姿勢で立っていた。
「ええ、いるわよ」
アクサが返事をすると、ハリアーの右腕が敬礼へと変わる。
「ノルン隊長が先生に頼みたいことがあるらしいのですが……」
「ああ、いつものね。すぐに行くわ」
アクサの返答を聞くと、ハリアーは一度お辞儀をしてから立ち去っていった。
「いつものって……」
「ついてくればわかるわよ」
アクサは医療品置き場から注射器とラベルのない薬びんをバッグ

に入れると、白衣をまとい
外へと出た。わけがわからないまま、クネスも続く。
アクサが向かったのは、自警団の事務所だった。入り口で待っていたハリアーが、アクサとクネスを案内していく。
キョロキョロと落ち着かないながらも、クネスは中の様子をメモ帳に記していた。アクサは慣れているのか平然と廊下を進んでいく。
地下へと向かう階段を下りると、一室の前でノルンがアクサを出迎えた。
「ああ、アクサ先生。今回もよろしくお願いします」
アクサへとなにやら資料のようなものを渡し、敬礼する。それを受け取ったアクサは、
「ええ、じゃあ例によって他のみんなは部屋の外に出ててくださいね」
真剣な眼差しで告げる。ノルンとハリアーはそれ以上なにも言わず地上へと戻っていった。
「ここで、なにがあるんですか？」
「なにがあるんですかじゃない。あなたも地上で待ってなさい」
「ええっ、それはないでしょう、アクサ先生！」
目をきらきらと輝かせているクネスは、ちょっとやそっとの説得では納得しそうになかった。
アクサは早々に諦めると、バッグの中の荷物を確認しながらつぶやいた。
「しょうがないわね。一緒にいてもいいけど、二つほど約束してね」
クネスが首をかしげていると、アクサは返事を聞かずに説明を始めた。
「一つは、なにが起こっても平然とした顔をしておくこと、もう一つはこの中の出来事を他言しないこと。約束できる？」

「小説に書くのは？」
「参考にするのはいいけど、そのまま書くのはダメ。自分なりにアレンジしてね」
クネスはしぶしぶながらも了解した。まずは入らないことには話にならないからだ。
「じゃあ、入るわよ」
ゆっくりと扉を開けると、そこはどうやら取調室のようだった。地味なグレー一色の部屋の中央に、同じような色の机が一つ。そこには人相の悪い男が座っていた。
入ってきたアクサをギロリと睨みつけるも、アクサはまったく動じた様子を見せない――むしろクネスのほうがおどおどとして、落ち着きがない。
「医者先生か。なんか言いたげだな」
「資料によると、民家への不法侵入らしいけど……あなたがやったの？」
「なんのことだか、わからねぇなぁ」
どうやらアクサが自警団に頼まれたのは、捕まった罪人の取調べらしい。なぜアクサが呼ばれるのかクネスには分からなかったが、とりあえずは成り行きを見守ることにした。
「指紋は出てるらしいじゃないの。早く話した方が身のためよ」
「けっ、だったら盗んだ代物はどこにあるんってんだ？　どこにもねえだろ？　指紋だって部屋の中では見つかってないんだ。証拠なんて……」
ドンッと机の上に、持ってきた薬びんを置く。男は動きを止め薬びんに注意を向けるが、ラベルがないのでなんなのかさっぱり分からない。
「この蓋を開けてもいいの？」
「開けたらどうなるってんだ？」

「それは、すぐに分かるわよ……」
アクサが蓋を開けると、中からアンモニア臭があふれ室内に広がっていく。クネスと男が顔
をしかめる中、アクサだけがニヤリと微笑んでいた。
「知らないわよ。どうなっても……」
「どうなるって、どういうことだ？」
「もがいてのたうって、それでも死ねないのは苦しいわよ？」
男の顔色が、みるみる青くなっていく。アクサと目の前の薬品を交互に何度も見やり、あきらかに狼狽していた。
「ちょ、ちょっと待て、なんなんだよこの薬は……」
「言っても知らないと思うけど……」
「いいから言ってみろ！」
男が立ち上がり、
「ソウテンナクヤキゲっていう草からとった劇薬よ。個人差はあるけど、吸い込んだら十分で
全身が痒くなってきて、だんだんそれが痛みに変わっていく。それから一時間ぐらい激痛が続
き、最後に焼けるような痺れが全身を襲って、意識を失う。そうなると葬式が必要ね」
「えっ！」
思わず声を上げたクネスの手の甲を、アクサがおもいっきりつねる。
「いたっ！　アクサ先生！」
「あらら、後ろの助手はもう症状が出てきたみたいね。ワクチンを注射しないと……」
アクサはバッグの中に入れていた注射器を出すと、クネスの腕に注射した。
「はい、これで大丈夫。わたしはもうワクチン打ってるから、あとはあなただけね」
「けっ、ハ、ハッタリだろ」

「ハッタリかどうかは、すぐにわかるわ。ほら、肘の辺りとか、痒くなってきてない？」
ビクッと体を震わせて、男は肘をかいた。一分、二分と時間が経過するにつれ、男がかきむしる回数が増えていく。
クネスが驚きつつ観察している横で、アクサが不敵な面構えで注射器を男の目の前にやった。
「さあ、早くしないと手遅れになるわよ。注射して欲しい？」
「た、頼む。おれにもワクチンを打ってくれ！」
「じゃあ、わかってるわよね？」
ニッコリとアクサが微笑むと、男は観念したようだった。うつむきながら、自分のやった罪と盗んだものを隠した場所を告げる。
アクサは逐一それを記帳してから、最後に男の腕へとワクチンを注射する。
「これで大丈夫よ。あとは罪を償うことね。それと薬品のことはだれにもいわないこと。言ったら牢屋の中に違う種類の劇薬を投げ込むからね」
男は何度も頷くのを確認してから、薬品と注射器をバッグに戻す。ぐったりとうなだれている男を背にアクサとクネスは取調室を出た。
地上へと戻ると、アクサは資料をノルンへと渡した。ノルンはそれを受け取り詳細を確認すると、すぐにハリアーを確認へと向かわせていた。
「いやあ、さすがはアクサ先生ですな」
「誠意を持って話せば、だれでも分かってくれるんですよ。ちょっとしたコツがあるんです」
「誠意を持って話したって……だれがですか？」
アクサの後ろでクネスがぼやくと、微笑んだままアクサは肘鉄をクネスの腹へと食らわして

いた。
「いやあ、我々も見習わないといけませんな。いつまでもアクサ先生の手をわずらわせては自警団の名折れです」
「そんなことありませんわ。また困ったときはいつでもおっしゃってください。それでは」
アクサが会釈すると、ノルンは敬礼で返答していた。うずくまったままのクネスの腕を引き、アクサは自警団の事務所を去っていった。
「いててて……」
「まったく、余計なことは言うからそういうことになるのよ」
「誠意を持って話したなんて嘘を言って、薬品出して脅しただけじゃないですか。下手したらあの劇薬でおれまで巻き添えだったんですよ」
「劇薬ってこれのこと？」
アクサがバッグから薬びんを取り出すと、クネスは一瞬にしてアクサから距離をとっていた。
「うわっ、出さなくていいですって！　早くしまってください！」
慌てふためくクネスの様子を観察しつつ、アクサは口に手をやり白い歯を見せた。
「心配しなくても、これただのアンモニアだよ」
「はっ？」
「匂いをかいだだけで死ぬ劇薬なんて平気な顔して持ち運べるわけないでしょ？　だいたいその辺で転んで撒き散らしたらどうするつもりよ」
ケラケラと笑うアクサを、唖然とした面持ちで眺めるクネス。だが、それだけでは納得できないこともあった。
「じゃ、じゃあ全身が痒くなるってのは……」
「病は気から……じゃないけどさ。誘導尋問の要領かしら。痒みっ

て意識すればするほど全身
に広がっていくもんなんだよね。虫刺されとかでも、気づくまでは
かゆくないけど気がついて
から異様にかゆくなるっていう経験、ないかしら？」
「そりゃあるけど……」
　憮然として納得できないクネスを置き去りにして、どんどんアク
サは医院へと向かって歩い
ていく。慌ててクネスは追いかけ、さらに疑問をぶつける。
「もしかして、自警団の皆さんも知らないんですか？」
「もちのろんよ。こんなことばれたら恐喝でわたしが捕まっちゃう
わ」
　再び高らかに笑っていたアクサが、ピタッとその笑いをとめる。
そのままクネスに歩み寄る
と、人差し指をクネスに突きつけた。
「だから……いい？　この話を小説に使うときは、アレンジして使
うこと！　世間にバレたら
使えなくなるし、医者としてあまり褒められた行為でもないからね。
でないと……」
　アクサの口元が、不気味にゆるむ。クネスは生唾を飲み込むと、
まばたき一つせず何度もう
なずいていた。
「よろしい！　じゃあ医院へ帰って仕事の続きよ！」
　元気にスキップを踏みながら、アクサは医院へと帰っていく。ク
ネスは大きくため息をつい
てから、とぼとぼとアクサのあとについていった。

その６：窓からの侵入者

空がだんだんと暗くなり、近所の家から炊煙が立ち昇っていく。どうやら夕飯の支度がはじまっているようだ。

アクサは机の上のカルテを整理して、棚の中にしまう作業をしている。その姿をクネスはひじをついて呆然と眺めていた。

「結局、参考になりそうな話はなかったなぁ……」

ぼやきながら、あくびを発する。骨折り損のくたびれもうけとは、このことかもしれない。

と、突然窓から一匹の猫が診察室へと飛び込んできた。口には一匹の秋刀魚がくわえられており、診察室の中でもそもそと食べ始めている。

「あら、どこの猫かしら……」

「こんなところで食事をしてるんですから、野良猫じゃないですか？」

「野良猫は警戒心が高いっていうけど、薬品の匂いが好きなのかしら」

「どんな猫ですか、それは……」

「それはそのぉ、飼い主が薬品会社に勤めてるとか」

「飼い主がいる時点で、野良猫ではないです」

クネスのツッコミにアクサが頭をかきながら照れ笑いをしていると、今度は人影が窓から診察室へと飛び込んできていた。

同時に繰り出されたほうきが、悠然と食事をしていた猫を的確に捉える。だが、猫はまるで予想していたようにその場から飛びのいていた。もちろん口には秋刀魚がくわえられている。

「まったく、この泥棒猫！」
第二派が猫を襲う頃には、人影の正体はあきらかだった。オートエーガンを切
り盛りしている、アルマの娘で実質的な主人であるニオだ。
「このっ！　このっ！」
診察室の中でほうきをふりまわすニオ。猫は器用に一撃一撃を避けては、その合間に秋刀魚
の味に舌鼓を打っていた。
「ニオ！　部屋の中がめちゃくちゃになるだろ！」
意外にもその声を発したのはクネスだった。アクサはあっけにとられていたものの、今では
ニオと猫の攻防を微笑みつつ温かく見守っている。
「だって、この猫いつも魚を盗んで逃げるのよ！」
「んなことといってもなぁ……」
「今日という今日は、許さないんだからね！」
ほうきの乱打を繰り出すニオの股をくぐりぬけ、猫は縦横無尽に診察室の中を走り回ってい
た。ついに秋刀魚はきれいな骨を残して、猫の胃の中へと収まってしまった。
「ナァゴー」
まるでお礼でも言ってるかのように軽く会釈すると、猫は入ってきた窓から外へと逃げてし
まった。
「勝負ありね。ニオ」
後を追おうとしたニオのほうきをつかみ、アクサが告げる。暗闇に消えていった猫の逃亡劇
に、ニオもどうやらふんぎりがついたようだ。
「くうっ、今日も逃げられちゃった！」
ほうきを床に落とし、骨だけになった秋刀魚を拾う。頭と尻尾のほかは全て骨という、完璧

な食後の痕跡だった。
「わたしの夕飯なのに……」
「いいじゃないの。魚の一匹ぐらい」
「よくない！　いつもいつもやられっぱなしだもん！　いまに一泡拭かせてやるんだから！」
目を吊り上げているニオの頭を、アクサがポンと叩いた。きょとんとしているニオに、アクサがウインクしてみせる。
「どこの魚が一番美味しいのか、あの猫は知ってるのよ」
「えっ？」
「いつもオートエーガンから魚を取って逃げるんでしょ？　他の家とは一味違うニオの味付けを、あの猫は認めてるってことよ」
首を傾げつつニオは考えると、結論を感じさせる大きなため息を吐いた。
「猫に認められてもねぇ……」
「あら、猫にも認めてもらえないような食事が、人間に認めてもらえるかしら？」
アクサの言った言葉の意味を、ニオは即座に理解していた。猫が嫌がるような魚を、お客さんが喜んで食べてくれるはずがない。あの猫は、本当にオートエーガン――ニオの食事が大好きなのだ。
「そうだね。猫も一番だって言ってくれる店なんて、他にないもんね」
「そういうこと。きっとあの猫だって、お金があれば払いたいと思ってるわよ」
お金を持って支払う猫の姿を想像する。ニオは我慢できずに、プッと吹きだしていた。
「うん、わかった。今日のところは許してあげる」

「よしよし。母親と違って聞き分けがいいわね」
「でも次に盗まれたときには、きっちりとお返ししなくちゃ！」
指の関節を鳴らしながら、気合を入れる。ガクッとうなだれるアクサに、ニオはクスクスと
微笑んでいだ。
「それじゃあ帰りますね。どうもご迷惑おかけしました」
「いいわよ。アルマに比べれば可愛いもんだわ」
アクサにお辞儀をすると、ニオは床に落ちたほうきを拾い、窓から
外へと出て行こうとした。
「こら、待ちなさい。ちゃんと入り口から出ていくのよ」
「いいじゃない。ここから入ってきたんだし」
「他人の家では礼節を重んじないとダメよ。ニオだってオートエー
ガンに窓から出入りされた
ら嫌でしょ？」
「うぅ、確かに……」
しぶしぶニオは窓からではなく、診察室の入り口から外へと出て
いった。
「アクサ先生、いいんですか？」
去り行くニオを見送りながらクネスが尋ねる。アクサは首をかし
げつつ、クネスの目線を追
った。
診察室の中はニオと猫の格闘の痕跡が、いたるところに残っていた。
花瓶は倒れ中の水があ
ふれている。椅子は倒れ、カルテの一部は猫の爪跡が残り、床には
猫の足跡とニオのほうきに
ついていた泥が散らばっていた。
「ま、まあ、今から片付ければいいでしょ。クネスも手伝ってくれ
るわよね？」
「いいですけど……」
「じゃあ、チャッチャとやっちゃいましょ！」

それから一時間、アクサとクネスは診察室の片づけに追われるのだった。

「さっ、これでおしまいね」

診察室の中をきれいに片付け、消毒を終わらせると、ようやく病院らしい雰囲気を取り戻していた。クネスはぐったりとして、椅子へと腰掛けうつむいている。

アクサは気持ちよさそうに背伸びをすると、腰に手をやりポツリともらした。

「今日は平和な一日でよかったね」

「えええぇぇ！　どこが平和だったんですか！」

クネスが絶叫する。アクサは事もなげに、ニッコリと微笑んでいた。

「だって、怪我したり、病気になったりした人はだれもいなかったじゃない。病院なんて儲からないほうがいいのよ」

「それでよく医者を続けてますね……」

「まっ、ボランティアみたいなものだし。わたしの医術でみんなが助かるというよりは、なにもおきないで毎日過ぎていくほうが望ましいのよ」

満足げに頷くアクサを見て、ようやくクネスは取材の相手を間違えていたことに気がついたのだった。

その６：窓からの侵入者（後書き）

マスカーレイドに異常なし！？第４話　アクサの平和な一日……いかがだったでしょうか？
今回はマスカーレイドで医者を営むアクサ先生を中心に、住人の魅力を引き出してみました。
楽しんでいただけたのなら幸いです。
まだまだマスカーレイドに異常なし！？はシリーズとして続いていきますので、どうかよろしくお願いします。評価、感想などあわせてしていただければ、とてもうれしく、励みになります！
では、第５話をお楽しみに♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6954a/

マスカーレイドに異常なし！？　第４話　アクサの平和な一日

2010年10月11日12時53分発行